

生田祭の社会学的研究 (1)  
——生田祭の輪番制と岡方の運営方法——

小 松 秀 雄

## Summary

### Sociological Study on Ikuta Festival (1) — Rinbansei (the rotation system ) and Hyogo Okakata —

Hideo Komatsu

Ikuta Shrine (Ikutajinja or Ikutasan) lies in the central district of Kobe (Chuo-ku) and is regarded as the shrine of the local tutelary deity, the ujigami of Kobe. Ikuta Festival (Ikutasai or Ikutamatsuri) is the most important event and is held on April 15. In the first place of this paper I consider the rotation system of Ikuta Festival that is called rinbansei. Through examining rinbansei the relation between the traditional festival and urban society in the center of Kobe would be made clear .

In the second place of this paper I take up the Heisei Fifth (1993) Ikutasai and consider the festival committee offices (saireiinkai). In the Heisei Fifth the districts (toban tiku) which are called Hyogo Okakata have played the important role of the dedication to Ikuta ujigami (hoshitoban). In this case the festival committee offices have been based on neighborhood associations (chonaikai or jichikai) which are the Japanese local community. For example, most representatives of the festival committee offices are chonaikai or jichikai president (chonaikaicho or jitikaicho) in the districts of Okakata.

はじめに

神戸は日本を代表する国際港湾＝貿易都市であり、一般に「モダンで、エキゾチックで、ファッションナブルな都市」というイメージを与えている。都市イメージを構成するエレメントに関しては様々な議論があるけれども、神戸の歴史と都市の構成要素——建築、街並み、住民、食物、行事など——を想い浮かべると、確かに一般的なイメージに対応するものが多い。そのような都市イメージを抱かれている神戸にも、不思議なくらい日本の伝統的要素がいろいろな場面や分野に残っている。例えば生田神社は神戸の都心の真只中にあり、現在でも都心の環境の重要なエレメントになっている。神社の建物と敷地は周囲の近代建築とは異なる、緑豊かで厳肅な景観を生み出すだけでなく、正月の初詣、節分、春の生田祭、夏祭り、七五三などの行事には多数の人々が詰めかけ、独自の雰囲気と風景が創り出される。そう考えると、近代都市神戸の住民が日本古来の伝統的文化を受け継いでいるように思われる。

本稿では、日本を代表する国際的近代都市と呼ばれる神戸の都心に受け継がれている生田神社の春の例大祭を取り上げ、次のような問題に関して論述してみたい。まず、明治維新と第二次世界大戦を契機に日本の神社を取り巻く社会的環境は、めまぐるしく変化したけれども、現在の生田神社はどのような組織によって成り立っているのか。次に、戦後の春の例大祭、すなわち生田祭は新しい社会的環境の下で、いかなるやり方で実施されているのだろうか。現代の都市は日本全体の産業構造の変動によって大きな影響を受けているが、神戸もその例外ではなく、都市イメージの良さに反して決して楽観を許さない状況に直面している。そのような厳しい状況の中で、生田祭はいわゆる氏子区域の住民の意欲と努力によって実施されている。ここでは平成5年度の奉仕当番である兵庫岡方地区の祭りの運営組織＝実践方法を取り上げ、分析してみたい。

## 1. 生田神社と地域社会——宗教法人と氏子組織

生田神社の歴史と宗教的本質に関しては、通常の祭礼研究の場合には最初に考察すべき重要な問題ではあるけれども、社務所が発行した『生田神社誌』、『生田神社史（上）（中）（下）——後神家文書』、及び現在の宮司である加藤隆久氏が編集された『生田神社——神道史研究——』などの優れた研究があるので、それらを参照してもらいたい。ここでは祭礼の社会学的分析に立場を自己限定して、祭祀組織と祭りの運営方法を解明するために必要な社会組織的側面を取り出し、考察していく。

神社の社会的位置づけは時代により随分と変化しているので、神社の社会組織も歴史的状況を抜きに一般化することは慎まねばならない。そこで、古代律令体制下の神社、武家政権下の中世から近世の神社、明治から昭和20年までの国家神道体制下の神社、戦後の神社というふうに仮に大きく四つに区分してみると、現代の神社は戦後の民主主義の政治制度＝法律体系に依拠する宗教法人である。原則としては行政機関、民間企業などの政治団体や経済団体から独立

した、神職と氏子住民から構成される宗教上の法人組織である。生田神社の場合も宗教法人の基本的ルールに則って、概ね以下のような内部組織と人員から構成されている。

責任役員会（神職と氏子の代表＝総代）、専従の神職と職員の組織、氏子総代会、評議員会、氏子世話人、一般氏子、崇敬者

それぞれの神社には固有の社会史と慣行があるために、実際には法律の形式通りには構成されず、また運営されていないケースも少なくないけれども、生田神社は格が高く、神職と氏子が多かったために神道の団体としてはかなり合理化されている。『生田神社誌』や後神家文書を読むと、世襲の社家（海神・刀禰・後神の三氏）の勢力が強く、民衆の神主、頭屋制、宮座は育たなかったようである。その社家も近世で絶えてしまい、明治以後は官選の宮司が就任しているの、国家神道の教権制秩序に基づいて生田神社は宗教的合理化が進んだものと推測できる。もし一般氏子の意向と生田神社の良き伝統を無視して宗教的合理化が進められたとすれば、問題として取り上げるべきであるけれども、そのような強引な改革はほとんどなかった。

さて、現在の氏子区域は神戸の中央区と兵庫区のほぼ全体に及んでおり、一般氏子は20～30万人と推測される。膨大な数の氏子の上に世話人と総代、さらに神職と責任役員がいるが、宗教法人としての組織の運営に直接関わるのは、専従の神職と職員、並びに一部の総代に限られる。世俗化と流動化が進む現代の日本の大都市では、地元の特定の神社に対して深く関わろうとする住民は少ない。言い換えれば、転勤や就職などの理由から何回も住まいが変わる人が一つの神社に愛着を抱いたり、行事にも積極的に参加することは困難であり、彼らの内面からは氏子であるという意識も失われていくだろう。神道離れとか神社離れという、日本の伝統的宗教の存亡に関わる本質的な問題ではなく、むしろ社会経済的理由から「一つのお社にコミットメントできない、氏子でいることができない」状況、つまり特定の神社からの氏子離れが広がっているのではなからうか。もはや昔のような制度宗教や団体宗教の時代ではないから、神道に限らず信者成員の団体離れは多かれ少なかれの宗教でも起こっている。戦前の国家神道体制下では、全ての住民は地域の神社の氏子になるように強制されたのに対して、今日では「どの神社の氏子であるか」、また「どの程度の氏子であるか」を任意に選択できる時代になっている。したがって、団体離れする信者成員を強制して宗教法人に引き戻すことはできない。ただ、今の日本の社会では経済の分野でも教育の分野でも競争が激しくなって、人生を左右する失敗の確率も高いために、神頼みと称してお詣りをする人が増えているから、氏子になる可能性が高い住民は多いと予想される。資本主義と科学技術の発達により世俗化と流動化が進む反面、人間の生活と生命を脅かす要素も絶えず出現するので不安は決してなくなるならない。そこから神に対する志向も生まれる。

神戸の都心にある生田神社でも、世話人や総代という役割において神社と直接関わる住民は少ないのに反して、初詣には百万人を越える人が手を合わせに来るし、春夏秋冬の季節の祭りにも訪れたり参加したりする住民は多い。ミナト神戸で港湾の業務に携わる人々、あるいは都心で商業を営む人々、さらに都心で暮らす生活者にとって生田神社はこの上もない守神であるらしい。転勤族にとっては、生田さんは他の神社と変わらぬ、通りすがりの一つの神社に過ぎ

ないかもしれないけれども、神戸の中心地区で長く仕事を続ける者と生活する者には守神＝氏神になるだろう。俗っぽい見方で恐縮だが、神戸の都心を拠点とする大小様々の企業が生田神社の「氏子」になっており、強力な財政的基盤を提供している。日本では昔から有力な武家や公家たちが神社と寺院を経済的に支えてきたから、現代の企業が神社を支援してもいっこうに不思議でないし、また差し支えない。いずれにせよ、中央区と兵庫区において生活する住民とビジネスを営む企業が中心となって行われる代表的祭礼が生田祭である。

## 2. 生田祭における輪番制

生田祭は生田神社の中でも最大の例祭であるから、明治以来、地元の又新（ゆうしん）日報と神戸新聞には繰り返し掲載され、また専門家による研究もいくつか発表されている。例えば、前出の『生田神社－神道史研究－』に所収の島田清「生田神社と郷土史」、加藤隆久「生田神社研究拾遺」がある。前者は主に近世の生田祭（当時の一之祭）を扱っているのに対し、後者は明治、大正、昭和の生田祭の変化を跡づけている。いずれも、分量が多く信頼できる後神家文書や『生田神社誌』を基礎資料にした力作であり、生田祭の全体の仕組みと変化をかなりの程度解明しておられる。この章では、両者の研究を参考にしながら、現代の生田祭の運営組織の基本的形態を社会学の立場から再検討していこう。

島田氏の論文において論述されているように、生田祭は近世においては一之祭（いちのまつり）という名称で、8月20日、または7月30日に行われていた。中世以前のことは、文書類の記録が残されていないために不明であるが、一之祭は生田神社の由緒を記念する儀礼であり、神功皇后の伝説を再現するような形で和田岬への神幸式が実施された。一般に神社の由来をドラマ化して儀礼を創造することはそれぞれの神社において繰り返し試みられており、その儀礼は当該神社の最大ないしは最も重要な祭りになる可能性が高い。一之祭という名称も、生田神社の由緒を記念する最も重要な祭りであるという意味が含まれていたものと想像される。もし古代から中世にかけての一之祭の姿が復元できれば、生田神社の由緒も今よりも明確なものになるだろう。残念ながら古代から中世の文字資料は空襲などで消失してしまい、今のところ一之祭の形成過程を解明することは難しい。

加藤氏の論文は主に明治以後、昭和40年代までの生田祭の神幸式を取り上げているが、輪番制に関する説明も重要な部分になっている。まず、島田氏の研究でも問題とされていた点で、夏に行われていた一之祭がいつ頃、なぜ春の生田祭に変わったのか。いろいろな観点から考察できるかもしれないが、恐らく近代の神道体制が確立される過程で全国的レベルで祭祀の体系化が進められ、春と秋に例大祭が設定される傾向が広まったのではなかろうか。4月15日に生田祭が変わったことも、近代の神道体制における改革の方向に沿ったものであろう。祭りの日が夏から春に変更されるに伴い、祭祀の組織と実践方法も変わったのだろうか。その点に関しては、戦後に至るまで余り大きな変化はなかったようである。『生田神社誌』に掲載されている「寛文三卯年八月二十日和田崎御幸之次第書」と絵巻物、大正10年の神幸式、さらに加藤氏が記

述している昭和15年の神幸式は実によく似ている。江戸時代の儀式と行列の形態がほとんどそのまま終戦直後まで受け継がれている。戦後は神道体制の大変革の波が生田神社にも押し寄せてきた。それは、神戸の都心にあった故に猛烈な空襲によってほとんどの建物が破壊された状態から立ち直る過程とも重なっていた。

さて、戦前までの生田祭には、明確に地区割りされた区域の間で奉仕当番が毎年完全に入れ替わる慣行は見られなかった。あるいは頭（当）屋制や宮座のような閉鎖的祭祀組織も存在していなかった。頭屋制に基づいて祭祀が営まれていたケースでは、戦後になって大体頭（当）組制と呼ばれる民主的な輪番制に移行している。生田祭の場合には、頭屋制という特権を伴う閉鎖的輪番制ではなく、ある程度固定された奉仕役割が氏子区域の地区に割り当てられていたように見受けられる。それは、恐らく近代以前の町や村が役割分担しながら協力して生田神社に奉仕するシステムを継承したものであり、最初から神職以外に宮座や頭屋は存在していなかったから、民主的な奉仕システムに移行しやすかったものと想像される。加藤氏の説明と『生田神社復興造営誌』によれば、空襲で破壊された生田神社が戦後十年余りの歳月をかけて復興されたことを契機に、民主主義化と都市化という時代の流れを考慮しながら、昭和33年に輪番制が発案され、34年から実施されるようになった。生田祭の運営と実践の方法に関しては、輪番制が発案される前から様々な議論があったようであるが、この章では発案から実施に至るまでの誕生の過程は省略して、輪番制のおよその輪郭と基本的意義を記述するにとどめたい。

生田神社の氏子区域は中央区と兵庫区のはぼ全域に及ぶために、全部の町や住民が生田祭の奉仕を毎年引き受けることは、いろいろな点で困難が伴う。祭りには、特定の場と時間における集合的動作を通じて参加者の間に親密な交流と共同性が生まれ、個人と共同体＝集団の生命が更新されるという基本的意義がある。その場合に、何万人もの人間が特定の場所と時間に集まって集合的動作をすることは技術的に難しく、また彼らの間に親密な交流と共同性が生まれるということも考えにくい。むしろ、日常生活の中で一番身近な地域集団か、あるいは職業集団や教育集団が個人の共同性を確認する拠点となるので、それらのいずれかの集団を祭礼における実践と交流の基盤とすべきであろう。そう考えると、広大な氏子区域をまとまりのある適当な単位に区分することは、至極合理的なやり方である。結果として、表1のように中央区と兵庫区が15前後に区割りされて、それらの中で11地区が輪番制を構成するメンバーとなり、生田祭に交替で奉仕している。

表1の11地区を見ると、それぞれ独自の特性を持つ地域ばかりである。人口学、産業構成、景観、文化、歴史などの視点から見れば、種々様々な相違と類似性が浮かび上がってくるだろう。例えば、平成5年度の奉仕当番である岡方地区と、平成6年度の当番である三宮地区とでは明らかに多くの地域特性が異なっている。表2にあるように三宮のセンター街を中心とする地域―三宮本通り・三宮1番街・河原町通・大丸前・トーアロード・生田筋・京町筋などの商店街を含む―は、不燃化と高層化を主たる目的とする昭和40年代の市街地改造事業により、ほとんど住民のいない町となってしまった。5000人近くの人口が現在では200人前後に激減しているが、普通の地域社会であれば完全に解体して、ゴーストタウンのようにになっているだろう。

中央区									兵庫区						
1	3		5	7		9	11			2	4	10	6	8	
宮元地区	三宮地区	元居留地区	元栄海地区	諏訪山地区	山手地区	下山手地区	葺合地区	地域外	湊地区	岡方地区	東山地区	地方北部地区	地方中部地区	地方南部地区	地域外

表1 生田神社氏子その他区分表：表の中の数字は昭和34年から始まった奉仕当番の順番である。なお地区内の詳しい町名と町域は省略した。区分表の原本には手書きで町名と町域が書かれている。

地区 年代	三宮町				加納町		氏子区分 三宮地区 の総数
	1丁目	2丁目	3丁目	合計	5丁目	6丁目	
大正14年	2191	1542	969	4702	607	210	5519
昭和5年	2345	1534	941	4820	531	202	5553
昭和23年	1551	1166	618	3335	340	47	3722
昭和30年	1811	1197	678	3686	379	23	4088
昭和35年	1563	1083	676	3322	381	154	3857
昭和40年	1191	811	512	2514	164	52	2730
昭和45年	387	487	350	1224	16	29	1269
昭和50年	142	350	187	679	5	47	731
昭和55年	97	211	165	473	9	48	530
平成2年	50	81	72	203	0	3	206

表2 三宮地区の人口変動：国勢調査結果に基づいて作成した。数字は国勢調査年における町ごとの人口数である。センター街は三宮町になるが、氏子区分の三宮地区には加納町も含まれる。

ところが、三宮のセンター街は、そこに生活する住民の地域社会を失った代わりに、神戸の商業の中心的機能を引き受け、神戸にとって欠かすことのできない重要な地域に変貌している。いずれ別の機会に詳しく論述したいが、三宮地区には三宮神社東町町内会を除けば住民の自治会＝町内会が存在しないために、主にセンター街1丁目振興組合、2丁目振興組合、3丁目振興組合という名前の商店主の団体がこの地域の社会的ネットワークの基盤となり、祭りの運営組織を形成した。振興組合は昭和40年代に商店街振興組合法に基づいて結成された法人団体であるが、それ以前の町内会や商店主の任意組合を受け継いだ面も多く、住民の生活集団ではないけれども、機能的には自治会＝町内会に近い側面を備えている。元々、センター街を中心とする三宮町に住居兼用の店を構えた商店主たちは、1丁目から3丁目までの町内を管理する任意

団体＝組合を結成し、仕事の問題だけでなく生活の問題にも対処していた。そのような地域の団体活動を通じて独自の社会的ネットワークが、センター街地区には張り巡らされていたものと想像できる。生田祭の奉仕当番が回ってきた際には、素早く組合のネットワークが作動し、祭祀組織を作り上げたようである。生田さんはセンター街の商売の守神でもあったから、商店街の人々にとっては祭りにはほとんど抵抗がなかった、むしろ今では街の大切なイベントとして歓迎すべきことであった。

その他の地区にも個性豊かな地域が多く、それぞれの地区が自分たちの町にふさわしいやり方で祭祀組織を作り、祭りを実践している。前の宮司である福田義文氏が「生田神社の戦災復興論」（『生田神社－神道史研究－』所収）において力説しておられるように、民主主義の新しい制度の下では神社は各地区の氏子住民と相談・協力しながら、祭礼を実施しなければならない。言い換えれば、氏子住民の意志を尊重し、彼らの意欲と工夫を引き出すようにすべきであるとすれば、輪番制が最も妥当なシステムの一つになるだろう。

ところで、輪番制に移行した時に神幸式のやり方も時代の変化に合わせて変更された。毎年氏子区域のほぼ全体をゆっくりと主に徒歩で神幸する方式が改められ、トラックを使いながら全域をできるだけ早く巡行する方式になった。しかしながら、それも十年程試みられたものの、祭りの焦点がぼやけインパクトも余り強くないことなどを理由に、奉仕当番地区だけを行列が巡行する形に変わった。当番地区以外は適当に何ヶ所かの神受所と呼ばれるミニ祭壇を設置して、神職と一部の役員が小さな神輿を車に積んで回りながら、神受所の前でミニ儀式を行う。何百人もの行列が歩いて都心を神幸することは、自動車交通の発達した現代の大都市では危険であり、また都市の生活リズムに合わない。神戸の都心の幹線道路を巡行するためには様々な規制をしなければならず、少なくとも現在の段階では抑制された形での神幸にせざるを得ない。平成5年度と6年度の生田祭に参加して感じたことであるが、質量ともに拡大した氏子区域をカバーするための神受所とミニ儀式も、現代都市神戸にはふさわしいように思われた。

これまで既存の資料や研究を参考にして、生田祭の仕組みの基礎と全体像を概説してみたが、続いて平成5年度の生田祭を取り上げて、祭りと地域社会の関連をより具体的に探求していこう。

### 3. 兵庫岡方地区の祭祀組織――自治会＝町内会と祭り

平成5年度生田祭の奉仕当番は兵庫岡方地区であり、昭和45年と56年に続き、戦後の輪番制になって三回目の奉仕当番である。11地区の中では最も古い歴史を持つ地域であり、独自の強い意志と社会的特性が見い出された。この章では、最初に岡方の祭祀組織と実践方法の基盤となった社会的歴史的な地域特性を考察し、しかる後に岡方の祭りの運営の仕方を取り上げていく。

#### (1) 兵庫岡方地区の地域特性

岡方は近世都市兵庫津の地子方（じしかた）の三方（岡方・北浜・南浜）の一つとして繁栄



した町であり、北浜が七宮神社、また南浜が和田神社の氏子区域であったのに対し、岡方は生田神社の氏子になり神社と祭りを支えてきた。兵庫区では岡方の他に南部、中部、北部、東山の四地区が輪番制を構成するメンバーになっているが、元々は近世兵庫津の地方（じかた）であり、明治以後に都市化された地域である。兵庫の地方四地区とともに岡方は明治から昭和初期まで神戸の政治・経済・文化の中心として繁栄を誇っていた。昭和6年から10年頃にかけて阪急三宮駅と国鉄三宮駅が開設され整備されるにつれ、神戸の中心は兵庫区域から三宮地域に移動した。

神戸という都市それ自体の歴史が日本の近代化と経済変動を体現しているが、その神戸の内部では兵庫区域が日本の重化学工業や産業全般の変動の影響をもろに受けて来た。昭和の初めに神戸の都心が三宮に移って以後、戦後は昭和40年頃まで兵庫区域は神戸の重化学工業の拠点になっていたけれども、高度産業都市へと脱皮を図ろうとする神戸の都市政策により兵庫区域も転換を迫られることになった。ただ、日本と神戸の経済変動と連動した兵庫区域の産業と社会の変化に関する考察はここでは省略して、祭りを運営するための基盤となる人口と地域社会の変容について、国勢調査の結果を基にしながら再検討してみたい。

まず、生田神社が保持している「生田神社氏子地区その他区分表」に依拠すれば、昭和34年に輪番制がスタートした時に岡方地区に参加した町は次の通りである。

三川口町1丁目、門口町、湊町1～4丁目、江川町、西仲町、佐比江町、小物屋町、南逆瀬川町1～2丁目、神明町、南仲町、磯之町

昭和50年から52年にかけて、いくつかの町域と町名が変更された折りに、江川町と小物屋町がなくなり、その代わりに本町と兵庫町などが誕生した。したがって、昭和30年代の岡方と現在の岡方とは、構成町域や町名が完全に対応することはない。また、平成5年度の祭りの委員と協賛金を出している地域や自治会＝町内会を調べてみると、「生田神社氏子地区その他区分表」に合わない区分や町域も見られる。そこで、当該地区の人口変動の様子を概観するために、輪番制スタート時の地域と、平成5年度の委員と協賛金を出している地域を基準に表3を作成してみた。

大正9年（国勢調査が始まった年）から平成2年までの人口変動を眺めてみると、いくつかの特色が浮かび上がってくる。第一に、大正9年を頂点に全体の人口総数は戦前は多少減少しながらも横ばいの状態が続いていたのに対し、戦後は大幅に減少している。戦争の被害のためか、特に終戦直後は人口がほとんどの町で激減している。10分の1程度に落ち込んでいる町もあるから、恐らく空襲のためにほとんど住めない状態になったのだろう。その後は昭和40年頃までは人口が増加したものの、戦前のレベルにまでは回復しなかった。昭和40年を境に、ほとんどの町で再び人口総数が減少するようになった。現在の人口は大正9年の約3分の1になっているが、最近5年間はほぼ7500人前後で安定している。現在の3倍もあった大正から昭和初期の人口を、どのように解釈したらよいのだろうか。ある意味では戦前の人口は多すぎて過密の状態であったのかもしれない。現在の人口が、今日のアメニティの基準からすれば快適に生活できる「正常な状態」なのかもしれない。人口は多ければ良いというわけでもないし、増加

	大正 9	昭和 5	昭 23	昭 30	昭 40	昭 50	昭 60	平 2
三川口 1 丁	1131	1094	375	643	1002	538	420	447
門口町	1584	1229	95	306	991	906	695	617
湊町 1 丁目 ～ 4 丁目	9012	8428	3188	4722	5327	2581	2043	2146
江川町	470	443	112	223	382	6		
西仲町	379	400	79	276	311	172	102	83
佐比江町	1601	1362	821	1163	853	683	606	585
小物屋町	364	298	589	698	530	265		
南逆瀬川町 1～2 丁目	2407	2373	138	242	425	130	129	72
神明町	531	444	69	111	103	338	232	180
南仲町	521	491	88	197	243	143	99	93
磯之町	489	432	91	191	301	450	175	140
西柳原町	1862	1584	271	543	1154	730	656	668
東柳原町	1723	1518	194	349	543	283	289	267
浜崎通	2303	2017	626	932	911	676	591	616
本町 1～2 丁目							841	907
兵庫町 1～ 2 丁目						1041	762	697
総 計	24377	22113	6736	10596	13076	8942	7640	7518

表 3 兵庫岡方地区の町別人口変動：国勢調査結果に基づいて作成した。兵庫区は人口変動が激しい地域で、町域と町名の変更が何回も行われた。昭和50年から52年の変更だけを取り上げると、江川町と小物屋町がなくなり、本町と兵庫町が誕生した。

すれば良いというわけでもない。

もちろん、人口の減少には好ましくない傾向が伴うことがある。それは、若者と働き盛りの大人が流出して人口の高齢化が進むこと、並びに子供の数が減って将来の人口の補充が困難になることである。いずれも地域社会の活力を低下させると同時に、地域社会の運営に支障を来す要因となる。岡方地区の場合は、果たしてどの程度好ましくない傾向が現れてきているのだろうか。その問題に答えるために、平成 2 年度国勢調査結果を基にして表 4 のような年齢別人口構成表を作成してみた。神戸市全体の人口構成を基礎的尺度にして考えれば、兵庫区は子供の人口比率が低いのに反して老人の人口比率が高い。その点に関しては西区は兵庫区と正反対の構成になっているから、もし単純に神戸市内での人口移動を仮定すれば、兵庫区から流出したニューファミリーは西区のニュータウンを形成したという仮説も成り立つ。岡方地区も概ね兵庫区全体の年齢別人口構成を反映した形になっているが、子供も老人も比率がやや低く、全ての年齢層にまんべんなく分布していると言えよう。今のところ、特に問題となる程のアンバランスな人口構成にはなっていない。

ただ、岡方の地区内では町ごとに年齢構成が随分異なっている点が気になる。特に子供の比率の高い町（神明町、南仲町、浜崎通）、特に二十代の若者の比率が高い町（南逆瀬川町、神明町）、高齢者の比率が高い町（三川口町 1 丁目、湊町、西仲町）、相対的に子供が少なく若者と

	人口総数	0～19才 人口	20～29才 人口	65才以上 人口
神戸市全体	1477410	377324 0.25	2097.5 0.14	169316 0.11
中央区	116279	23688 0.20	17841 0.15	15657 0.13
兵庫区	123919	24044 0.19	16964 0.14	20766 0.17
西区	158580	50686 0.32	20481 0.13	12573 0.08
岡方地区	7518	1305 0.17	1064 0.14	1015 0.14
三川口1丁目	447	80 0.18	68 0.15	74 0.17
門口町	617	98 0.16	83 0.13	91 0.15
湊町1～4丁	2146	243 0.11	242 0.11	333 0.16
西仲町	83	13 0.16	14 0.17	13 0.16
佐比江町	585	79 0.14	63 0.11	87 0.15
南逆瀬川町	72	9 0.13	18 0.25	6 0.06
神明町	180	52 0.29	57 0.32	20 0.11
南仲町	93	26 0.28	14 0.15	11 0.12
磯之町	140	24 0.17	31 0.22	24 0.17
西柳原町	668	101 0.15	95 0.14	93 0.14
東柳原町	267	52 0.19	29 0.11	26 0.10
浜崎通	616	176 0.29	105 0.17	32 0.05
本町1～2丁	907	220 0.24	152 0.17	104 0.11
兵庫町1～2	697	132 0.19	93 0.13	101 0.14

表4 平成2年兵庫岡方地区の町別・年齢別人口構成：『神戸市町別世帯数・年齢別人口—平成2年国勢調査結果—』に基づいて作成した。表の数字は人口と比率（少数点で表示）である。なお少数点の計算に際しては二桁以下は四捨五入した。

高齢者が多い町（磯之町）など。町ごとに著しく異なる年齢別人口構成を、どう解釈し評価すればよいのか。たとえ古い町でも、新しい大規模な集合住宅が建設されれば、そこにニューファミリーが大量に移動してニュータウン型の人口構成になるだろう。あるいは歴史の古い地域でも、若者が働く会社があって、そこに独身寮があれば若者が多くなるだろう。現代は日本の社会全体に流動化を促進する要因が増えているために、いろいろな観点から人口構成の変動を考えていかなければならない。仮に今の時点でニュータウン型の人口構成であっても、子供と若者の補充が欠けていると三十年後には高齢者中心の町になってしまう。地域社会の健全な運営と存続には、ある程度均衡のとれた人口構成比率が前提となるので、極端な人口構成にならないように行政担当者も地元の住民も気をつけねばならない。

国勢調査結果の面で多少の不安を感じさせるとは言え、聞き取りや参与観察を通じて得られた感じでは岡方地区には戦前から住んでいる住民が多く、地域生活を通してお互いに顔なじみというケースが少なくない。彼らの中から自治会＝町内会を支える役員が出ている。岡方と自分の町に対して愛着を持っており、氏神である生田さんの行事に対しても前向きな態度で関わろうとしている。

## (2) 祭りの運営委員会と住民組織—祭りの実践方法をめぐって

既に指摘したように、祭りの組織と運営方法には様々な形態があり、神社祭礼の場合には宮座とか頭屋制と呼ばれる方式が以前はかなり見られた。戦後の民主主義化の過程で閉鎖的で差

別的な運営形態は、ほとんどが開放的で平等な頭組制に改められた。また、国家神道体制も廃止され、神社は政治や経済の団体から独立した宗教法人に変わったために、祭礼への参加も自由で任意な方式になった。生田神社には宮座と頭屋制は存在しなかったようであるが、輪番制は開放的で民主的な頭組制に相当する形態であり、そこへの参加も原則としては自由で任意なものである。そのような形態と方式の場合には、祭りを実践する強い意欲と優れた能力を持つ者が出て来なければ、祭りは成り立たない。

幸いにも岡方は昭和45年と56年の生田祭を引き受けており、経験者が何人もいたし、彼らの間には固有のネットワークが作られていた。もちろん、全てが整い無事終了するまでの間には、いろいろな問題を解決しなければならなかった。平成5年度の生田祭へ向けての準備は、本番の半年以上も前から進められた。最大のポイントは、祭祀組織全体を統括する総合委員会の役員をスムーズに選べるかどうかである。これは委員会の体制が全て確立された後に聞き取りしたことであるが、平成4年11月頃に生田神社と岡方の関係者の間で話し合いが行われ、経験豊富で指導力と意欲のある井上慶一氏が総合委員長に選ばれた。井上氏は神明自治会の会長と兵庫区自治会連絡協議会の幹事をされており、幅広い社会的ネットワークを持っていたので、総合委員を始め各種委員を選ぶ際には最適の位置にいたのではなかろうか。祭りの委員と自治会＝町内会役員の関係については後ほど検討することにして、井上総合委員長を中心とする総合委員会と各種委員会の体制は例年よりも順調に平成5年の初めには整ったようである。

総合委員会と各種委員会の機能と組織構成に関しては細かい点まで取り上げることは差し控えるが、会社にたとえれば取締役会＝経営役員会と機能別に分節化された各種の部課との関係に近い。総合委員会は、内部の各種委員会だけでなく神社や外部の団体と連絡を取りながら、祭りの全体の方向とか内容を定める。生田祭は長い伝統を持つ祭礼であり、神事と諸々の儀式については神道の基本的形式と生田神社の伝統に則って実施すればよいから、氏子の委員会が決める余地はほとんどない。総合委員会で特に問題となったのは、祭礼の費用の調達と参加者の動員である。岡方では平成5年の秋に『生田祭』という小冊子を発行しており、それによれば費用は約2000万円、委員と神幸の担当者は約700人に及んだ。これだけの費用と人員を短期間の間に集めるには、やはり広範な社会的ネットワークが必要である。そこで、岡方地区の祭礼の奉仕に際して基盤となったネットワークを探ってみよう。

さて、総合委員会の下で活動した各種委員会にはどのようなものがあるのか。公式に組織された委員会は次の通りである。

猿田彦、神輿、四方綱、子供神輿、梶原武者、神受、稚児、神賑、獅子頭、お先太鼓、接遇、給与、行列道筋、警備連絡、広報、記録、救護、用度委員会

これらの委員会には委員長を含めて数名の委員がいるから、全体で200名前後の組織になる。「委員会メンバー表」、「兵庫区自治会連絡協議会役員名簿」、及び聞き取りを通じて得られた話に基づいて委員の社会的属性を検討してみると、地元の自営業者、自治会＝町内会の役員、居住歴20年以上の者、生田祭の経験者などの特徴が浮かび上がってくる。ここで特に注目したい点は、岡方地区のほとんどの自治会＝町内会長が委員会の重要なポストに就いていることであ

る。湊町1丁目から4丁目までの四つの町、佐比江町、神明、磯之（浩美）、東柳原町などの現役の会長が総合委員と各種委員長に適当に配置されているように見える。この地区の自治会＝町内会のシステムでは、主に町レベルの単位自治会＝町内会があり、その上に小学校区レベルの連合会があり、そして兵庫区全体の連合会があるが、各レベルの会議が定期的開催されるから、長年にわたって自治会＝町内会の活動をしている者は顔見知りも多い。知らない間に公的なネットワークが形成されており、そのネットワークは当事者の意図や予想を越えて、いろいろな機能を発揮するのではなかろうか。例えば、生田祭のハイライトとも言える神幸式の子供神輿には、湊小、明親小、兵庫大開小の児童たちが参加していた。彼らを直接動員する組織はPTA、婦人会、子供会になるかもしれないが、自治会がそれらの団体と連携して子供神輿委員会を運営しているように受け取れた。

だが、子供神輿に比べると大人神輿の場合には事情が少し異なっている。輿丁の顔ぶれを見ると、関西電力、神港魚類、神戸海産物、カネテツデリカフーズ、福山通運などの企業の若い従業員が大半を占めており、岡方地区の若者はほとんどいない。これは、現代の大都市の神社祭礼ではよく見られるケースであり、必ずしも異常な形とは言えない。昔のようにそれぞれの地域社会ごとに明確な年齢階梯組織が存在すれば、その中の若者組を通じて地域の多くの若者を動員できるだろう。しかし、現在の岡方には年齢階梯組織は存在しておらず、地元の青年を素早く動員する術は見当たらない。その代わりに岡方地区に事業所を持つ企業にお願いして、若手の従業員に輿丁として参加してもらうことになる。これも、現代の大都市における地域社会と企業の良好な関係を示す形態であると見なせば、殊更に批判することもできない。ただ望むらくは、岡方に住んで生活する地元の青年たちが輿丁の主力になり、生田祭を盛り上げて欲しい。そのためには、時代に逆行するような年齢階梯組織ではなく、現代の社会にも適合する緩やかな「年齢結合システム」を地域社会の中に構築しなければならないだろう。自治会＝町内会が地域の小学校や中学校を基礎にして年齢別集団を作り、少しずつ交流させる仕組みを工夫すれば、若者たち全体に交流の輪を拡大させることができるものと思われる。

途中から現在の地域社会と自治会＝町内会の問題点を指摘する形になってしまったが、他に注目すべき点として指摘しておきたいことは、「委員会メンバー表」には町名ないしは自治会＝町内会の名前が各委員の氏名の摘要欄に書かれていることである。それは、自治会＝町内会を支える「地域共同体」とも言うべき町内（まちうち）が一体となって祭礼を引き受けようという意志の現れではなかろうか。試みに、「委員会メンバー表」に基づいて祭礼の委員会と町内との関連をクロス集計してみると、表5のような結果になる。表5の上段にある地域の名前は、「どこの町内の者かを確認する」ために岡方の人々が摘要欄に書いた町の名前を基準として作成した。恐らく、表5の地域名によってお互いに「地域共同体所属」を同定し合っているものと考えられる。クロス集計を眺めると、さすがに総合委員会は全体を統括するだけあって、ほとんどの町内から委員が選ばれている。その他では稚児委員会も、岡方全体から行列に参加する稚児を募集する方針に従ってほとんど全ての町内から委員が選ばれている。これらの二つの委員会を除けば、委員が出ている町内は委員会ごとにかなり片寄っている。例えば神賑、獅子

町内	神 明	浩 美	湊 町	柳 原	浜 崎	佐 比 江	三 川 口	門 口	そ の 他	合 計
委員会										
総合委員会	7	6	10	6	5	1	3	1	1	40
猿田彦委員会	6	4	1	5			2	1		19
神輿委員会		1					3	3		7
四方綱委員会			1				4	2		7
子供神輿委員会	5	1				5	1	2		14
梶原武者委員会	2					6		1	1	10
神受委員会	4	3	1				2		2	12
稚児委員会	6	2	4	5	3	3	2	2	2	29
神賑委員会				5						5
獅子頭委員会			2							2
お先太鼓委員会			2						1	3
接遇委員会	7	5	5				2			19
給与委員会	3	4						4		11
行列道筋委員会		7	1				1			9
警備連絡委員会			5	2	2					9
広報委員会	2		1							3
記録委員会	1	1					2	1		5
救護委員会			4							4
用度委員会			2							2
合 計	43	34	39	23	10	15	22	17	7	210

表5 町内と委員会のクロス集計：総合委員会が書いた「委員会メンバー表」に基づいて作成した。町内は岡方の大ざっぱな区分である。その他は新開地、兵庫町、永沢町などの余り委員が出ていない地域である。

頭、救護、用度の委員会は一つの町内だけで委員会を組織しているし、また神輿、四方綱、お先太鼓、給与、行列道筋、警備連絡、広報の委員会は三つまでの町内で委員をまかなっている。自治会＝町内会のネットワークを通じて、お互いに顔見知りで協力しやすい者たちがそれぞれ特定の委員会に集められた結果かもしれない。ただし、各種委員会の配分を見ると、神明や湊町などの特定の町内だけに集中しないように配慮され、いずれの町内でも必ず何かの委員を出している。岡方全体が協力し合って奉仕当番を引き受けている姿が浮き彫りになり、見事な組織構成になっていると言えよう。

さらに、人的構成の面だけでなく祭りの成否の鍵を握る費用の調達面でも、自治会＝町内会は非常に重要な機能を発揮した。岡方の報告書『生田祭』を見ると、自治会あるいは町内会の協賛金という名目で総合委員会に寄せられたお金が、祭りの予算の大半を占めている。もちろん、自治会＝町内会が普段の会費と同じように祭典費を集めているのではなく、総合委員会を中心とする祭礼の委員が募ったお金が、岡方という当番地域が一体となって祭礼の奉仕をしていることを表すように、最も無難な公的な地域団体名を付けて協賛金として寄付されたものと思われる。（筆者が現在生田祭と比較調査の対象にしているミナト横浜の都心にある日枝神社の例大祭では、伊勢佐木地区を始めとする町々では町内会が公然と祭典費を出し、町内会の

名前で祭礼の日程を掲示している。)

以上の通り、自治会＝町内会のネットワークが強力な力を発揮したとは言え、神社の祭礼は神道という特定の宗教を基盤とするものであるから、現代の法律と社会制度の公的なルールでは自治会＝町内会が祭礼に直接関与する、すなわち祭祀組織になったり祭典費を強制することはできない。その問題については井上総合委員長も十分に気をつけておられ、町内の自治会活動と神社の祭りを切り離している点を繰り返し強調していた。生田神社の側でも自治会＝町内会に奉仕当番を依頼することはない。氏子世話人や総代、あるいは神道に熱心な氏子がたまたま地域団体のリーダーになっているということはよくあるために、結果的に自治会＝町内会の役員と祭礼の委員が重なってしまう。前に取り上げた三宮地区には、岡方のような自治会＝町内会は存在しないので、センター街の振興組合が組織形成の基盤となるネットワークを与えている。ただ、組合の事務局によれば生田祭が振興組合の会議の正式な議題に上ることはないそうであり、組合の役員が非公式に祭礼委員を選んでいるようである。

現在は昔のように、氏子組織が恒常的な宗教団体として存続しているケースは稀である。社会の世俗化と流動化により事実上解体しているところが多い。したがって、神社の何かの行事に際しては、氏子組織に代わって活動する地域団体なり商工団体などが必要になる。岡方地区では実質的には自治会＝町内会が、三宮地区では振興組合が生田祭を支えたと言えよう。それは、岡方では自治会＝町内会が住民に対して最も幅広い影響力を持つ地域団体であり、三宮地区のように住民のいない町では振興組合が商店主に対して同様の影響力を持つ団体であることを物語っている。

おわりに

本稿では、生田祭の祭祀組織の基本的仕組みと岡方地区の事例を、社会学の視点から分析してみた。最初に指摘したように、神道と歴史の立場からの研究は加藤氏や島田氏の優れた論考があるので、重複は避け、今の社会、組織、生活実践などの視点から生田祭を取り扱った。もちろん、神道や歴史の研究と社会学的研究を結合していかないと、生田祭の全体像は解明されない。また、社会学的研究においては、輪番制を構成する個性豊かな11地区のそれぞれの運営組織と実践方法をより厳密に分析しなければならない。それらの問題は今後の課題としておこう。最後に、生田祭の調査の際にお世話になった生田神社の神職の方々、並びに岡方地区の祭礼委員の方々に心からお礼を申し上げます。

[本稿は神戸女学院大学研究所1992年度総合研究助成金による研究成果である]

(補足) 平成5年度生田祭の主な日程と神幸式巡幸図を掲載しておく。

4月6日(火)

14時～15時30分：生田神社会館にて総合委員会を開催する。約100名の出席者あり、井上総合委員長が議長になり、神社側の報告と各種委員会の報告が行われる。神事、儀式、神幸式の際における服装に関する説明、各種委員会の準備状況の説明など。この頃から、行列に参加する梶

原武者や神輿などの演技の練習が始まる。

4月12日（月）

19時～21時：湊八幡神社にて総合委員会を開催する。約50名の出席者あり、主な総合委員と各種委員会の委員長が準備状況を報告し、それぞれの役割の最終的な確認を行う。特に諸行事への参加者の数と日程を念入りにチェックする。

4月15日（木）

午前8時30分：役員は兵庫区柳原蛭子神社神社にて身支度し、車で10時30分頃までに生田神社本殿に集合する。午前11時～正午：生田神社本殿にて氏子奉弊（奉告）祭を行う。引き続き神社会館にて直会が行われる。13時30分：主な総合委員、猿田彦、梶原武者、並びに神職は当番地区以外の9ヶ所の神受所を車で以下の順番にて巡拝する。①上組（葺合）②三輪運輸（葺合）③元町商店街入り口（元栄海）④生田神社兵庫お旅所（兵庫南部）⑤蓮池氏宅（兵庫中部）⑥有馬芳香堂（兵庫北部）⑦東山公民館（東山）⑧生田神社分社（下山手）⑨近石ビル（諏訪山）※神受所における儀式は、神職と巫女による神事、並びに猿田彦と梶原武者の演舞の奉納から構成されており、現代の生田祭の基本になる行事である。翌日の神幸祭では、そこに神輿の賑わしの奉納が加わる。

4月16日（金）

午前9時：生田神社本殿にて発輿式、終了後神輿は車で兵庫区湊町公園に向かう。午前10時40分：湊町公園から神幸の行列がスタートする。以下、巡幸図にある通りのコースで神幸が行われる。16時頃、神幸が終了する。行列の参加者は車で生田神社に戻る。神幸式に巡拝された神受所は以下の通りである。①谷岡氏宅②河北氏宅③井上氏宅④神明神社⑤猿田彦神役小田氏宅、以上は岡方地区の神受所、⑥サンプラザ西側仏壇屋前（三宮）⑦山本写真館（宮元）17時30分：生田神社にて還御祭が行われる。特に本殿前の広場でフィナーレを飾る梶原武者や神輿の演技が披露される。

#### 主な参考文献

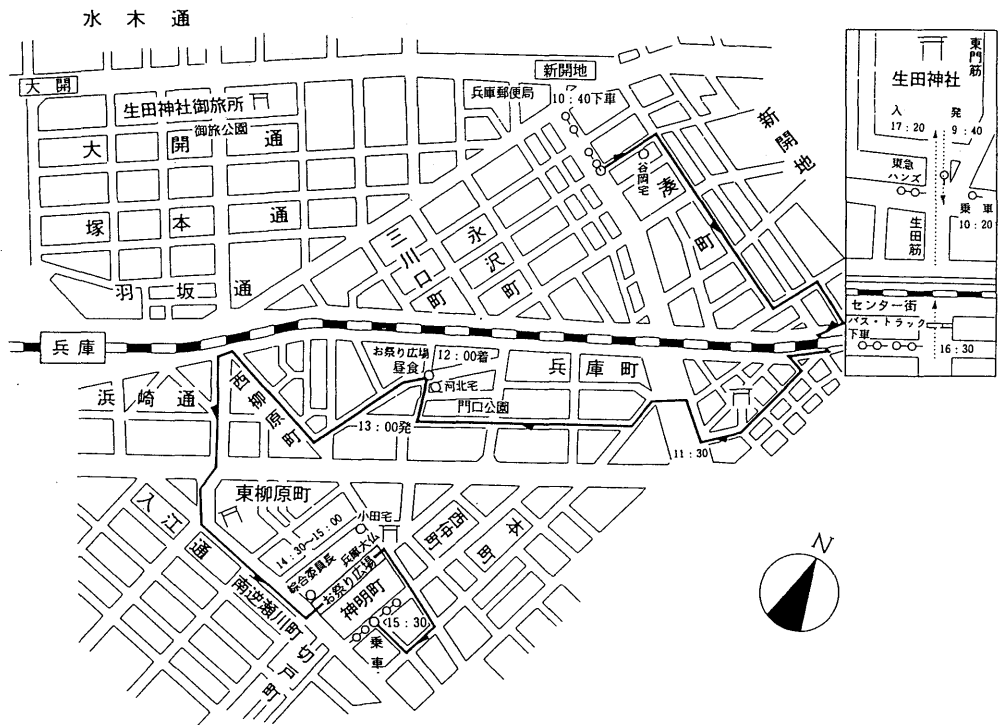
- ・大和田貞策編『生田神社誌』（生田神社社務所、大正十一年）
- ・福田義文編『生田神社史—後神家文書』（上）（中）（下）（生田神社社務所、昭和55年～63年）
- ・加藤隆久編『生田神社—神道史研究—』（生田神社社務所、昭和48年）
- ・生田神社復興奉賛会『生田神社復興造営誌』（生田神社社務所、昭和34年）
- ・奉仕当番岡方部『生田祭』（生田神社、平成5年）
- ・「神戸又新日報」（明治26年4月15日・4月18日の記事）
- ・神戸市教育委員会『神戸の民俗芸能—灘・葺合・生田編—』（神戸市教育委員会、昭和51年）
- ・新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史歴史編Ⅲ近世』（神戸市、平成4年）
- ・同編集委員会『新修神戸市史歴史編Ⅳ近代・現代』（神戸市、平成6年）
- ・兵庫区役所広報課『由緒あるまち兵庫』（神戸市兵庫区役所、昭和57年改訂版）
- ・神戸市中央区役所『生田区のあゆみ』（神戸市中央区役所、昭和57年）
- ・熱田公他編『兵庫県地名大辞典』（角川書店、昭和63年）
- ・三宮センター街連合会『三宮センター街三十年史』（大和出版、昭和53年）
- ・神戸市商店街連合会『神戸市商店街連合会20周年史』（神戸市商店街連合会、昭和46年）



- ・神戸市教育委員会『兵庫岡方文書』(第7輯第2巻)(神戸市教育委員会, 平成5年): 第1輯第1巻は昭和54年に刊行された。
- ・『第15回神戸市統計書』(神戸市役所, 大正12年)
- ・『大正十四年神戸市国勢調査結果表』(神戸市役所, 大正十四年)
- ・『昭和五年神戸市国勢調査結果概報・世帯及人口』(神戸市役所, 昭和五年)
- ・『第28回神戸市統計書』(神戸市役所, 昭和22年)
- ・『第29回神戸市統計書』(神戸市役所, 昭和25年)
- ・国勢調査結果の『神戸市町別世帯数・人口』, あるいは『神戸市町別世帯数・年齢別人口』昭和30年～平成2年(神戸市役所)
- ・神戸市市民局『平成元年度(第14回)住民自治組織実態調査報告書(神戸市の自治会・町内会)』(神戸市市民局市民文化課, 平成2年)
- ・神戸都市問題研究所編『コミュニティ行政の理論と実践—都市政策論集第3集』(勁草書房, 1979年)
- ・森岡清志他編『都市社会学のフロンティア—2生活・関係・文化』(日本評論社, 1992年)
- ・蓮見彦彦他編『都市政策と地域形成』(東京大学出版会, 1990年)
- ・倉沢進他編『町内会と地域集団』(ミネルヴァ書房, 1990年)
- ・Theodore C.Bestor, Neighborhood Tokyo, Stanford University Press, 1989.
- ・Claude S.Fischer, To Dwell Among Friends, The University of Chicago Press, 1982.
- ・藺田稔『祭りの現象学』(弘文堂, 平成2年)
- ・長谷川晴男編『神社祭祀関係法令規定累纂』(国書刊行会, 昭和61年)

### 生田祭神幸式巡幸図

平成5年4月16日



(原稿受理 1994年9月9日)